

THE CULTURE OF BLACK
日本語訳

黒の背後にあるもの

03 What is Behind The Color Black

「黒」という色について考えたとき、あなたはどんな言葉を連想しますか？「強さ」「重々しさ」「闇」「厳格さ」。私達の生活では状況に応じて選択された「黒」を見かけることがあります。例えば、服装にしても、フォーマルな装い、裁判官が着る法衣、僧衣などには「黒」が選ばれています。どうして赤や青や緑ではなく「黒」が選ばれているのでしょうか。たしかに「黒」からは何か共通の印象が感じられます。いったいこの共通認識はどこからきているのでしょうか。京都紋付は大正四年から黒だけを染め続けてきた黒染めの会社です。染めの黒さを競う黒紋付の世界で磨き抜かれた染色技術は世界でもっとも黒い黒染めを可能にしてきました。一見同じように見える黒紋付の黒ですが、実は「黒」まで染めあげる過程で必要な下染めの種類（草木染め、泥染めなど）によって様々な色合いの黒があり、なかには文化的背景を持つ素材で下染めをすることでさまざまな意味を持たせた黒があります。それらは最終的に辿り着く「黒」という色の背後に潜む精神的な皮膜だといえるでしょう。

昔の人達はその豊かな＜創造力＞と＜直感＞によって「黒」という色から様々な意味や解釈を見い出し、またそこで見い出したものを今度は生活に取り込むことで、自分達の世界を構築し理解する手がかりにしてきました。その中で培われた文化は、科学によって多くのことが明らかになりつつある現代においても今だ色褪せる事なく、魅力的な光を放ちながら静かに私達の生活に溶け込んでいます。

私達がつくり出したいのは実質的な染めの「黒さ」だけではありません。それは黒紋付に袖を通した時に感じるもの、私達の背筋を糾し、気持ちを律するなにか不思議な力です。それは「黒紋付」の背後にある文化、「黒」にまつわる私達の文化そのものなのです。京都紋付は究極の「黒さ」を追求しながらもその背後に文化をしっかりと染め付ける事ではじめて、長く着続けても深みのある「黒」、精神をも内包する「黒」が生まれるのだと考えています。

この冊子では「黒」の背後にあるものをいろんな角度から探っていきます。伝統的な「黒」もあれば身体的な「黒」もあります。あえてさまざまな黒をもちこんだのは、黒の文化が懐古的な視点だけにあてはまるものでは無いからです。「黒」にまつわる由来を知る事で、これまでなんとなく見ていた「黒いもの」が眼に見えない輝きを放ちだすのを感じていただければと思います。

追求を許された色

05 The Search For The Color

「黒」という色には絶対的な「黒さ」の定義が存在します。それは”光を反射しない方がより黒い”というものです。私達はものに色を感じる時、そのものが反射している光を感知することによって色を感じています。その反射光の量や波長によって色を識別しているのです。そして黒や白といった明度は光の量に、それ以外の例えば赤や青などの色みは光の波長に対応しています。ですから同じ赤の波長でも、より光の量が多いものを「白っぽく」、より光の量が少ないものを「黒っぽく」感じるようになっています。ではここで、最も赤い「赤」や最も青い「青」という色について考えてみましょう。それは赤の波長もしくは青の波長の光であり光の量（明度）もそこそこ、といった色だと予想できます。結局、最も赤い「赤」や最も青い「青」というのは人それぞれ認識に幅があり、明確に定義する事ができません。しかし今度は黒の場合について考えてみると、光を反射しない方が黒く見えるのですから、最も黒い「黒」というのは「一切の光を反射しない存在」として定義できてしまうのです。このような「一切の光を反射しない存在」というのはあくまでも理論上の存在ですが、そこに近付けば近付く程「黒い」ということは明らかなのです。黒は追求する事を許されたストイックな色であると言えるでしょう。

黒紋付の歴史は「黒さ」の追求の歴史でもあります。日本では、黒紋付は「高貴」の象徴として扱われていました。深みのある黒を出すためには何度も下染めをくり返し色を重ねていく必要があり、大量の染料を使う黒染めは非常に高価なものになります。当時の技術では何度も重ね染めをくり返した生地が非常にごわごわとした堅いものになり、黒染めの着物は刀を通さないと言われた程でした。それでもなかなか「黒」まで染める事は難しかったのです。また「黒」は並べて見ると黒さが濃い方はより黒く、淡い方はより灰色に近く見えるという特性があるために、いつか紋付においては黒ければ黒いほど上質であるとされるようになります。こうして染めの黒さを競った結果、日本の黒染めは世界最高レベルの「黒さ」を実現するようになるのです。

見えない存在、無の色

07 Invisible Existence, Color Of Nothing

私達の眼は光を感じる事で世界を見ています。光を感じる事が見るとことであるならば、「黒」という色は私達の眼がもっとも光を感知していない、いいかえれば「最も見えていない」部分だと言えるでしょう。そして究極の黒が「いっさいの光を反射しない存在」であるならば、それは「見ることができない」存在だといえます。

20世紀にはいって、人類はそのような究極の黒がこの世の中に一つだけ実在することを明らかにしました。それはすべてを飲み込んでしまいそこからは光ですら逃れる事ができないといわれる存在、ブラックホールです。ひとたびブラックホールに飲み込まれた光は決してそこから抜け出す事ができないため、ブラックホールに吸収された光が私達の目に届く事はありません。「一切の光が返ってこない存在」、ブラックホールこそが究極の黒だといえるのです。

実は近代科学が明らかにしたこの「見えない存在」としての「黒」を、日本で昔からなれ親しまれた伝統芸能の中に見ることができます。それは文楽において人形を操る人、または歌舞伎の舞台上で歌舞伎役者の手助けをする人、つまり「黒衣（くろご）」です。これらの伝統芸能では黒は見えないものという約束事があり、黒い衣装で全身を包んだ「黒衣（くろご）」は見えない存在であるとされているのです。この決まり事を理解していないと、黒衣の存在が気になって舞台を楽しむ事ができません。実際に姿を消す事はできなくても黒衣を纏う事で、「見えない」「いない」ということになっている。歌舞伎や文楽はそんな知的なフィルターを通して見る事で舞台から美しい幻想を引き出しているのです。

不变の色

o8 The Color Of Eternalness

モノの背後に目に見えるもの以上の意味や価値を感じ取った私達の祖先は、他方では「黒」を生活に取り込む事でモノに意味付けをしたり、黒を身につけることで自分達の意志を表したりしてきました。現在に至るまでに黒という色には様々な解釈が存在しましたが、なかでも「黒」は他の色に染まる事がない事から「不变」の色として多く扱われてきました。

例えば仏教の僧侶の日常の衣は、墨染といわれる黒い色の僧衣です。自らが神や仏の聖旨にもとづいて修行を積み世俗を超越した高い資格に到達するための戒めをつむ色で、黒は世俗の色を通さない皮膚の役目をはたしています。また江戸時代に女性がしていたお歯黒も、戦国時代の武士が自分の主君に忠誠を誓い、「二君に仕えず」という意志を表明するためにしていたものが、後の時代になって再び広まったものだと言われています。

このような「不变」にまつわる「黒」の解釈は世界的に広く一般的なもので、そのため現代においても根強く残っています。今でも裁判官が着る法衣には「何ものにも染まらない」という意味から絶対的な公正を象徴するものとして黒が用いられています。

闇を味わう文化

12 The Culture Appreciates The Darkness

—その羊羹の色あいも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑らかなものを口中へふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるよう思う。—

谷崎潤一郎著 「陰翳礼讃」より引用

昔の人が「見えない存在」として「黒」を文化に取り込んだのは、私達の生活が闇に親しんできたことと無縁ではないでしょう。谷崎潤一郎はその著書「陰翳礼讃」のなかで、日本人の生活全般に底通する美意識について、衣食住すべてに渡る例を挙げながら、闇と切ってもきれない関係にある日本的な美の本質を書いています。すべてを白日のもとにさらしくつきりとわかるのではなく、暗闇のなか、境界すらあいまいな色調のなかに底知れぬ深みを感じること。この眼に見えるもの以上になにかを感じ取る感受性が、モノの背後にある意味や価値を感じ取り、それこそを大切に思う私達の美意識の基盤となっているのではないでしょうか。

夜をあらわす色

13 The Color Of Night

昔の人が「黒」の中に「闇」を感じていたのならば、「夜」を表す「黒」が私達の生活のどこかに潜んでいるはずです。もちろん今でも夜を示す時に黒色をもってあらわす場合は数多くありますが、非常に抽象的な形であるため、またその起源があまりにも古いために多くの人が忘れてしまった「夜」を表す「黒」が一つありました。それは碁石の黒です。

囲碁で使われる碁盤と碁石。実は囲碁は古代中国において天文と易の道具として発生したものと伝えられており、全部で361ある碁盤の升目は旧暦の1年の日数を、碁石の白は昼を、黒は夜を表しているのです。囲碁は暦を理解する道具でもあったわけです。暦と言っても現在使われている太陽暦ではなく、月の満ち欠けをもとにした太陰太陽暦（旧暦）で、月になじみが深い日本においても明治ごろまでは旧暦が一般的でした。現在でも囲碁のルールにおいて常に黒が先手なのは、旧暦の1年が子の刻、つまり夜からはじまることから由来しているのだそうです。また白と黒を交互に打っていくことにも昼と夜のくり返しが反映されています。普段なにげなく遊んでいた囲碁にもそんなルーツが隠されているのです。

黒眼、変わらない価値

15 Black Eyes, Invariable Value

最後の「黒」は私達の瞳の色、黒眼についてです。実はこの「黒眼」、正確には虹彩と呼ばれる部分の「黒」に京都紋付が下染めにこだわる理由があります。瞳の「黒」は私達の色の感じ方に関わる「黒」なのです。

私達が色を感じる光が眼に入るとき、光の入り口である瞳孔の周囲にある虹彩がカメラの絞りのように働いて、奥へ通す光の量を調節します。このはたらきによって私達の眼は余分な光の刺激を受けずにすむのです。しかし瞳孔がこの役目を果たすためには、瞳孔以外の部分が外部からの光を完全に遮断する必要があります。このときに活躍するのが太陽の光を遮断する機能をもつメラニン色素です。メラニン色素とは太陽の刺激から身をまもるために、頭髪や皮膚にも含まれている暗褐色の色素で、太陽の照射が強く照射時間が長い地域で発達・進化した人類の眼や髪、皮膚に多く含まれています。日焼けであることからなにかと女性から嫌われがちなメラニン色素ですが、メラニン色素を多く含む虹彩は光の調整をするのに有利なのです。そして、虹彩に多量のメラニン色素が分布する黒眼は、瞳孔を通して必要量の光が内部に導かれるため、結果として微妙な色調も感じ取る事が可能なのです。

あいまいな色調の中に美を感じ、月光下の世界のような単色の色彩をも好む私達の色彩感覚に、この黒眼が与えた影響は言うまでもありません。また日本には春夏秋冬の四季があり、草木もまた四季の変化に応じて、若葉、青葉、紅葉、落葉して環境の色を変え、それとともに温度も暖一暑一涼一寒へと変化します。このように推移的に変化する環境に順応した私達日本人の眼と色彩感覚は非常に鋭敏なものになりました。

京都紋付の黒染めには、茜、藍、茶葉、など非常にさまざまな彩り豊かな下染めの過程があります。そしてこうした下染めの数だけ異なる黒の風合いがあります。それらの色彩鮮やかな下染めは深みのある黒を実現するために染め抜かれるのです。京都紋付が黒の中に潜む微妙な色あいにまで徹底してこだわり続けるのは、伝統的な価値感によるものだけでなく、身体的、風土的な特徴をもつ鋭敏な眼をも満足させる必要があるからです。身体的、風土的なものであるからこそ時代を経ても移り変わる事のない確かな価値基準だと考える、きわめて率直なこだわりだといえるでしょう。



京都紋付

会社概要

黒染めの技術と共に歩み続けて90年

大正四年創業以来黒一筋に生き、黒染めとはいかにあるべきかを追求してきました。私共は常に現状の品質に満足しないで、黒染めとはお客様にとってどうあるべきか、いいかえれば、もし私共が黒紋付を着るならば、どういった紋付を着たいかという事を真剣に考えてきました。テーマは「本物志向」です。売らんがための企画、見てくれだけの紋付ではなくお客様に来ていただきて本当に喜んで頂ける紋付、黒染めの本物とはどうあるべきかということです。

「私共が考えた”真の本物”とは

染色に関してメーカーが永久保証できる紋付

地球環境を考えたエコロジー染料の使用

雨、炎天下においても色落ち、ヤケ等をしないで通常の着用条件に
しっかり耐えることの出来る紋付

以上の条件をクリアした商品であるが故に私共は半永久的にメンテナンスサービスを提供できるのです。そして最後に社員一同、心を込めて大切に染めさせて頂きます。

沿革

大正4年

初代荒川金之助によって荒川染工場として現在の地に開業。

昭和44年

2代目荒川忠夫により株式会社京都紋付を設立。

昭和53年

黒染業界において画期的な濃色染めを考案「純黒」として発表。黒染業界初の濃色染めを世に送りだした。当時、同業他社には想像もつかないほどの黒で、他社の染色技術ではとうてい実現不可能であった。これにより、「技術の京都紋付」としての評価を確立した。

昭和56年

大ヒット商品である「深泥黒」を完成。黒染シェア60%の現在を築く足がかりとなる。

平成元年

昭和天皇大嘗祭における装束「小忌衣」製作の御下命を請け賜り、京都岩清水八幡宮に自生している山藍を使用して、古来より伝わる染色技術により再現製作する。

平成8年

黒染業界においてまだ未開発であった、エコロジー染料を開発し、地球にやさしく、品質においても画期的な「黒染革命」という染色技術を完成。一步先を考えた染色技術、着用における品質を重視した本物企画として世に送りだす。

平成8年

4代目として現在社長 荒川 徹 が就任。

平成13年

京都のアパレル業者の依頼を受け、洋装素材に伝統の黒染め技術を活かした黒染めの研究開発を開始。約半年後、洋装業界では他に例を見ない深い色合いの黒染めを開発。「深黒」と命名、「御黒染司」の商標を登録。京都のアパレル業者がそれを企画製品化し販売している。

株式会社 京都紋付

〒604-8823 京都市中京区壬生松原町51-1
TEL 075-315-2961 FAX 075-326-1277